

「およその発達段階 (Ver.5)」の記録方法など

【1.目的】

子どものおよその発達段階を把握して継続的にモニターすることによって、支援方策や就学先を検討するための客観的な資料とする。

【2.注意事項】

得られた結果は、あくまでも「およそ」の発達段階であって厳密なものではない。観察では、項目に類似する内容やエピソードも記録する。これにより、観察回数が多くなればなるほど資料としての有用性は高まる。

【3.記録方法】

①生活年齢を左軸にとる。初回の観察結果を赤色で、例えば、3歳2カ月▶とし、以降1年間は赤色のペンで記録する。また、該当する項目については、□を■のように赤色マーカーで塗りつぶす。2年目からは、青色で4歳2カ月▶とする。同様に3年目は緑色で記録する。こうすることによって、子どもの1年ごとの成長を自みて把握することができる。

②項目内容に到達していると判断した場合 (各色で塗りつぶす) ※項目の上から下にチェックするコツ！
項目内容に到達していないと判断した場合 (塗りつぶさない)

観察からは判断できず、担任や保護者からの聞き取りでも分からない場合 (キャンセル)とする。
観察からは判断できず、担任や保護者からの聞き取りから到達していると考えられる場合 とする。

③到達しているか否かの判断においては、およそ70%(10試行で7回)以上できているものとする。ただし、内容の似ている別行動で判断しても構わない。例えば、「紙を半分に分ける」という項目の判定について、「ハンカチをたたむ」という行動ができたなら、到達しているものとみなす。

④4項目連続で到達している場合(キャンセルを1つまで含んでも可)、それより下位項目については便宜上、到達しているものとみなす(↓印を付ける)。ただし、『社会性』については例外とする。その理由は、発達段階を年齢に応じて階層化することが困難であり、特に自閉症の子どもの社会性は、いわゆる「虫食い状態」になる場合が多いからである。

⑤(12+■)の数を12(カ月)で割った値を、その領域についての「およその発達年齢」とする。例)■が38個 → 4歳2カ月

【4.およその知的発達水準(IQ)の算出方法】 ※あくまでも参考値

{(ことばの発達年齢)+(描画の発達年齢)}×1/2

×100 ≒

生活年齢(C. A.)

【5.データの妥当性】

本アセスメントシートにおける「知的発達水準」と「田中ビネーV」とのデータの一致率は、±0.57歳(25事例、それぞれの検査の実施日の差が3カ月未満、無作為抽出)であった。

【参考文献等】

- ・『学習内容表』『経験内容表』『教育課程』(筑波大学附属大塚特別支援学校)
- ・『KIDS乳幼児発達スケール』三宅和夫監修、発達科学研究教育センター、1989。
- ・『グッドイナフ人物画知能検査』ヘンゾウツク日本版、小林重雄著、三京房、1977。
- ・『遠城寺式乳幼児分析的発達検査法』九大小児科改訂版、遠城寺宗徳、慶應義塾大学出版、1977。
- ・『現場の保育士や教師からの聞き取り調査、園児の観察記録、母子手帳等』、『乳幼児精神発達診断法』津守真著・船尾敦子、大日本図書、増補版1995。
- ・『新版K式発達検査法2001年版標準化資料と実施法』新版K式発達検査研究会編、ナカジヤ出版、2001
- ・『S.M.社会生活能力検査』三木安正監修、日本文化科学社、1980。

抱えている困難 (Ver.5)

安部博志 作成 (筑波大学附属大塚特別支援学校) 2010年2月第5版

社会性(人と関わり)

- 他者の気持ち・迷惑・場の雰囲気・恥づかしさ・暗黙のルール・遠慮・常識、等の理解困難
- 双方向の自然なやり取り・協力・同年齢の友だち関係形成、等の困難

「どんなに努力しても～」と読んでください

不注意

- 注意集中、指示の聞き取り、対象をよく見ること、持ち物を忘れない、等の困難
- 優先順位を決めること、整理整頓、等の困難

多動性

- 落ち着いて席に座っていること、体を動かさずじっとしていること、等の困難
- 黙って話を聞くこと、発言の順番を守ること、集会や行事におとなしく参加すること、等の困難

衝動性

- 物事をじっくり考えること、自分の行動が及ぼす影響について考えること、等の困難
- カットとなる気持ちを自分で抑えること、暴言や暴力を自己抑制すること、等の困難

自尊心・意欲

- 自尊心の低下・活動への意欲低下・自信の喪失・マイナス思考・不安傾向

イメージネーション(柔軟な思考)

- 気持ちの切り替え(こだわり)・新しいことや変化への対応、等の困難
- 興味関心を幅広く持つこと、空想の世界と現実世界を区別すること、等の困難
- 常識的な発想の困難(ユニークな発想)

コミュニケーション

- 相手の表情・ニュアンス・冗談・比喩や慣用語、等の理解困難
- 双方向の会話・会話の維持・共感、等の困難
- 声の抑揚・ボディランゲージ、等の自然な表出の困難

身体感覚

- 聴覚・視覚・触覚・味覚や嗅覚・暑さや寒さ、等への過敏性または鈍麻、
- パニク・フラッシュバック

その他

- 視力(右:) 左:) 視野狭窄(有・無)
- 聴力(db) ※100以上:補聴器 70:大声で 35:不自由なし
- 手先の微妙な動き・スムーズな身体の動き、移動の困難
- 学習の遅れ、宿題や勉強に対する回避行動
- いじめ・不登校・ひきこもり
- 自傷行動・他害行動・非行・家庭内暴力
- 抑うつ症状 □ 虐待、マルトリートメント

(名前)

※就学前については記入せず

聞く

- 聞きもらし・聞き間違い・内容理解の困難

話す

- 適切な音量と速さで話す・想起したことをまとめて言葉にすること、等の困難

読む

- 学年相当の漢字の読み・文章の意味理解・抑揚をつけて読む、等の困難

書く

- 似ている文字を区別して書くこと・文字の形を整えて書くこと・作文を書くこと、等の困難

計算する

- 足し算と引き算・九九の暗記・筆算・量やかさ・図形・時計・文章題、等の理解困難

推論する

- ものごとの因果関係の理解・自分の行動の影響を予想する・見取り図や展開図の作図・理論的な考え、等の困難

記録方法: 該当する

該当しない

顕著

その他、観察から得られた補足メモを記入する